

盲ろう者支援のための指文字用触手話ロボットの開発 —ろうベースの盲ろう者の情報獲得自立の支援を目指して—

【盲ろう（聾）者とは】目が見えず、耳が聞こえない視覚・聴覚二重障害者を盲ろう者と呼びます。盲ろう者は全国に 23,200 人います（厚労省「平成 18 年度身体障害児・者実態調査」）。

【盲ろうの種類】先天的に、または生まれてすぐに耳が聞こえなくなった場合は、二重障害の内、ろうが先行したということで、「ろうベース」と呼びます。このような方は、手話が意思伝達の中心になっている人が多いのですが、後に視覚に障害が出ることで、手話が見えにくくなります。視覚が使えなくなると、手話が読めないのに、触って手話を読む、「触手話」を使ってコミュニケーションをとります。全国盲ろう者協会「平成 16・17 年度盲ろう者生活実態調査」によると、盲ろう者 312 名中 44%が触手話を利用しています。

一方、元々聞こえていた人は「盲ベース」の盲ろうと呼び、盲学校で点字を習っているため、パソコンに点字の表示器をつなぐと、ある程度は自立して情報を得ることができます（インターネットのニュースを読むなど）。

【ろうベースの盲ろう者の情報獲得】触手話は現状では人間（の手話通訳者）が発信するしかなく、ろうベースの盲ろう者は、一人で情報を得ることが困難です。例えば、毎日のテレビのニュースを知る、新聞を読むなどにも通訳が必要です。指文字は手話の一種で、かな 50 音や数字、英字を個々に表すものです。触手話で指文字を提示できるロボットがあれば、ろうベースの盲ろう者は情報獲得がある程度自立できる可能性があります。

そこで、これを実現する原型（プロトタイプ）を作成して評価するのがこの研究の目的です。原型を作って触手話ロボットの有効性を検証して、本格的にロボット開発を進めるべきか、また、開発する場合にはどのような点に留意するのが良いのかを確認します。

（なお、指文字を読めないろう者もいますので、ろうベースの盲ろう者全員に指文字ロボットが役に立つというわけではありません。）



（参考：国立障害者リハビリテーションセンター・リハビリテーションマニュアル 17「盲ろう者と触手話」 <http://www.rehab.go.jp/whoclbc/japanese/pdf/J17.pdf>）。

研究代表者 感覚機能系障害研究部 森浩一